

昭和二十四年七月十三日  
昭和二十四年十二月十五日  
第三行  
（種郵便物認可）  
（毎月一回・十五日発行）

（通第二二三号）

近角常観先生御忌月特集号 御講話

横超の現益

山本普道記

慈光

第十九卷

第十二号

御病後の近角先生と  
本曾子夫人の御遺影

於求道学舎の庭



○  
癡病突如似電光  
養病戰々感無常  
用心学道須工夫  
煩惱由来無尽藏

壬申月初八

常観

奥山に技折々々は誰がためぞ

○ 親の身捨てて帰る子のため

(一念のこころ)

跡戻りくくして迎るらん

○ 甲斐なきことに心迷いて

(後念のこころ)

近角常観先生の御講話

### 横超の現益

益

### 山本普道

場所 東京市本郷区(現・文京区) 求道会館  
定刻 午前十時半、会館満堂。(昭和十二年三月)  
中年の老紳士(常音先生)静かに正面御仏前(御木像)にお灯(あかし)を献じ香を捧げ、勤行の準備終りて退席しずかなるお念仏の声満堂におこる。

ややありて正面に向って左手のドアをあけ、近角夫人、常観先生を抱くが如くあらわれたもう。夫人六十余才と見ゆ、気品高く、中肉中背にして、黒地の縫紋の羽織。常観先生は、肉付き血色よき童顔、お体肥満し、背高きも数年前よりの中風にて、殆んど歩行不可能、夫人片手をひき抱くが如く、一步一歩しずかに正面壇上、御仏前まで案内される。先生、立ちたるまま左手にて、きんを打ち、読経、会衆一同誦和、終りて先生静かに会衆に向つて着席。眼鏡をかけたもう。教行信証、御真筆本、玻璃版大形をしずかに押し頂きて、信の巻と覚しき所を開きたもう。

四年前に御温顔を壇上に拜し奉る。まことに童顔、例の

如く柔和にして御慈愛あふれるばかり。満面に法悦輝き、光顔(こうげん)魏々(ぎぎ)とは、かかるお顔なるべしと思う。一目お見上げ申しただけにて、温きお光に満ちた先生のお胸の内がはつきりと魂に伝わって来て、何ともかとも申しあげ様なき尊きお姿なり。

先生の背面には香煙縷縷として御木像御本尊をかすみに包み、馥郁(ふくいく)たる香りあたりに漂う。

昭和十二年三月七日午前十時半、求道会館、日曜講座。外は小雨しとしと降り、早春とはいえど今朝は雪さえちらつきたり。

聴衆の中に、帝大生二十数名の制服姿、青壮年の多数あるがことに目立てり。お念仏の声一しきり、先生静かに語り出したもう。

### 横超の現益

今日の題は「横超の現益(おうちようのげんやく)」と致しておきました。横超とは「横超の金剛心」の横超であります。

親鸞聖人は、お自らの慶よろこばれた信仰の趣をたたえて「横超の金剛心」と仰せられてあります。それについて先日來お話し申して居ります。

### 御本書信巻

その横超の金剛心を頂きますと、信の巻の下巻に『金剛の真心を獲得（ぎやくとく）する者は、横に五趣、八難の道を超え必ず現生（げんしよう）に十種の益（やく）を獲、』

と仰せられてあります。横超の金剛心を頂いたら、その時たちまち横超と申しまして、一足飛びに、五趣八難（迷いの世界）をはなれて、広大な仏の浄土に生まれさせて頂く身になり、この世に生きている間に必ず間違ひなく、十種（無量の功德をかりに十に代表させてあげられたもの…註山本、以下同じ）の御利益を頂くのであるとの御文であります。

### 一念発起

今日の話の要は、先日來お話し申しました如く、歎異鈔第十四条に、いよいよこの金剛心を獲得するところを書いて

『弥陀の光明に照らされまいらする故に一念発起するとき金剛の信心を賜りぬればすでに定聚（じようじゆ）の位に攝（おさ）めしめたまいて命終（みようじゆ）すれば

諸の煩惱惡障を転じて無生思（むしようにん）をざとらしめたもうなり』とあります。

弥陀の光明に照らされまいらする故に一念発起するとき「一念発起するとき」とは、広大な如來の御慈悲に照らされた時の一念の信を頂いたことを申すのであります。

一番肝心な所は、この一念発起の所であります。一念発起とは、ただ自分であら有難いと思うことをいうのであると思われましようが、そんな自分の方が、ひとりぎめで心に頂くのでありませぬ。

これ如來の広大な御慈悲が、私共の心の中に徹して下さるから起るのであります。先日もある人が來て尋ねて申されるには、

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなり」と信じて「念仏申さん」とおもいたつころのおこる時、すなはち撰取不捨の利益にあずけしめたもうなり（註、歎異鈔、第一条）

とありますが、この「念仏申さん」とおもいたつころのおこるとき」とはどんな時ですか、と聞かれました。

これは自分の方で有難い心をおこさねばならぬのであろうか、そうだとすれば、どうすればありがたく思われるだろうか、どうしても自分にはありがたく思われませんかとい

うところにつきあたってしまうのであるが、これは自分の思う心ではない。お慈悲が徹して下さって、ひとりでお念仏申さずには居れなくなつたがたである。お慈悲がとどいて下さると、ひとりでお念仏があふれてくるのであります。

### 福島氏の入信

一例をあげて申しますと、これは昔のことでありまして………ここにお集りのお人などは、子供の時から真宗のはなしをお聞きになって、お念仏申した人が多いのであります。ところが、そんなお方たちは、お念仏申すことはむづかしいとは決して思つては居られませんでしよう。その代りに、お念仏申しても一向ありがたくなれないと思つて居られるのであります。

所が自分の家は神道で、一遍も生まれてお念仏申したことがないという人が、念仏申さずに居れなくなる場合があります。これが念仏申さずに居れぬ心地です。一例をあげますと、広島文理科大学教授の福島政雄君、この人は早く学生の頃から信仰に心掛の深い人でありました。所が、青年というものは大抵、信仰とは、如來のお慈悲をよることで、その信仰にふさわしく、人に親切をつくし同情深く生活することであると、まあ一通りに、かように考えているものであります。他の宗教で言へば、汝の敵を愛せよと

か、悪を憎むなどか、愛を行なえとかいうようにすることが多分信仰であらうと、かく思うのであります。

人にはやさしくしてあげる、敵を憎まぬ、なかなかよいことであるので、まあかく考えて福島君もはじめやっていたのであります。ところが何事もない時は、これが実行出来るようであるが、段々自分の都合が切迫してくると、そして内省が深くなってくると、実は優しくも、同情も出来ぬ自分であることがわかつてきた。そこで、今まで、実行が出来ていると思つていたのに、それでは全く駄目だとい

うことがわかつてきて、真面目な人であるだけ、真剣に苦しんで居りました。

所がその頃、此処に講話を聞きに來て居られると、ことに夏の求道会の時、私が、我々は親切も出来ず、よろこびも出来ぬ、何ともして見様のない奴である。かかる自分ももう駄目だと考えるのであるが、豈はからんや、如來様の無涯の御慈悲は、かかる奴を、むしろ仏さまの方から憐んで下さって

「そうあらう。おまえの心をつめたいことをかなしませずに私のあたたかい心に抱かれよ。可哀そうに可哀そうに」と、向むかうからどこどこまでも憐んで下さるのであると申しましたら、福島君は忽ちに気がついて

「そうであつたか！」

何もかも出来ぬ仕方のない、冷たい私をあわれに思召して、

汝、一心正念にして直ちに來れ

我能く汝を獲らん

と、こちらを、どこどこまでも憐んで下さるのが、如来のお慈悲であるか！」

### 如来のお心に温められて

平素から念仏している人は、念仏することはむづかしいことではないと思うているが、これは青年の人がよく言うのでありますが、信者の人々の申されるようなお念仏が一週となえたいが、どうしても出来ませんとよく言います。

こちらから称えるのはありませぬ。有難いお念仏が称えられぬ所か、あさましい心のかたまりで何ともして見様のないこの心を如来さまの方から御覧なされて、そのして見様のない奴なればこそ、どこどこまでも見てやるぞとの広大な御慈悲でこちらを満たして下さるのであります。

こちらの温い心で冷たい他人の心を温めるのが御信心であると考えていたのが、豈はからんや、冷たいこちらを温い如来のお心が

「汝がそうしかあり得ないのは煩惱の所為である。汝は

### 如来の作願

こんな心がありがたくなつたって何の役にもたたぬ。こんな心がありがたくなつたりするのでなくて、かかる心の私をあわれと思召して、どこでもおみすてない大慈大悲のお心をもつて下さるのが如来の広大なおこころ、おなまけであります。聖人の御和讃に

如来の作願さがんたずぬれば 苦惱うしろやうの有情をすてずして 廻向しめむを首しめとしたまいて 大悲心をば成就せり

苦しんでいる私に、大慈大悲のお心に向けて下さるのである。これがあるがたい。これが親鸞聖人の如来廻向ということであります。

### 如来廻向と自力廻向

この如来の御廻向は真宗の者は子供の時から聞いているが、これは親鸞聖人独特のことで、他にはないのである。

廻とは、まわすということであり、向とは向ける、ということである。私共が善い心を起こしてこれを人に向ける——善根功德を人に向けること——私共の方から人や仏に向かつてかくの如くするのがあたりまえの廻向である他に言う廻向は皆そうである。願わくばこの功德を一切に廻向して菩提の道につく様にとやるのである。

若し、人に親切にしたり同情したりするのなら、その廻向にあてはまる。然し、福島君の例に言う様に、これが出

まことにあわれである」

と、あわれみ助けて下さる広大なお心を聞いた時、ああ、それほどのお慈悲でありますかと、念仏もうさんとおもうところがおこるのであります。

### 方向轉換

福島君は今教育界でこの他力信仰をすすめている人です。その人はそれきりで心の方向をかえてしまいました。愛するのが宗教、人に親切つくすのが宗教と思っていたが、平素それが出来る時はそれでいいが、まさかという時がくると、人のことなどかえりみでは居れなくなつてきて、親切とか愛とかは、何処へ行つたかなくなつてしまふ云うことが為すことと思うこと、自分のことばかりになつてしまふ。それ所か思う様にならぬと人をのろう、世をうらむ全く見違える様な、冷たい心になつてしまふたのであつた

### 私の経験

私もそうであつた。初めは、本願寺のため、世の為、國の為と思つて堂々とやっていたが、自分の仕事や、愛を、人が正しく認めてくれぬとなると、不平不足がいつしか強くおこつて来て、世をうらみ、人をうらむに至つた。そんな心では駄目である。随分努力しても見たが向こうが思う様になつてくれぬと遂に絶望してこちらが冷たい心になりこちらがあさましくなつてしまつた。

来ぬ様に行き詰つてもうのである。そうすると廻向とはどういふことかと言ふと、天親菩薩の語に、

「如来が廻向する。一切煩惱の心をすてずして、大悲心にて成就するを廻向という」

と。一般の廻向とは、こちらから人に施すをいうのである所が先述の如く人に善くしてやる廻向は行詰つて来る。そして、苦しんでいるのは人でなくて、やっている自分自身が苦しんでいるのである。故に、むづかしい言い方ではあるが、人を助けるのでなくて、くるつとまわつて、如来の作願をたずぬれば、この私の苦しんでいるのをあわれんで私を救いたいばかりに願を起こして下さるのである。私を可哀そうに思召して、大慈大悲のお心で私に向かつて下さる。

この教があらわれたのは、聖人によって初めてあらわされたのであります。多くの人は、こちらが有難くなつて称えるのが廻向と考えているのであるが、こちらがやることはきつと行詰るのであります。平常無事な時、自分の都合の善い時にお慈悲を喜んでゐるのは、まさかとなると、あさましい心にかわつてきます。その時、有難い心で称えよとならば、どうなります。ここを仏がちやんと知つていて下さつて、よろこべないのは煩惱の所為だと仰せられるのであります。

先日出した雑誌にも書いて置いたのでありますが、あさましい煩惱にすぐ覆われてしまう私共の様な者は、この娑婆では仏性をみる、悟りを開くことは出来ませぬ。煩惱で覆われて喜べぬこの私を可哀そうと思召して下さる所の御慈悲が、どこまでも、どこまでもおあわれみ下さる。

### 無涯の大悲

「どこまでも、どこまでも」これが大切であります。これが無くては信仰の徹底は、とても出来ぬのであります。仕方がないと言えば人間は皆仕方がないのであります。然るにこの仕方がない人間を、仕方がないと見捨てずに、何処までも見て下さるのが仏の御慈悲であります。この涯のない限りのない大慈大悲心にあたためられて、どんな氷もどんな深い闇も、遂にはとがされてしまつて、遂に「念仏申さんとおもう心」がおこつてくるのであります。ここが大切なところであり、ここを大初に申し上げます。

### 信仰生活とは

皆さんは長い間、宗教をお聞きになつて、いろいろの人生問題に出会われたことでしょう。そしてそれを信仰によつて解決したいと思つて居られるのは無理ありません。私も多年、この御慈悲のおかげで日暮らささせて頂いて居ります。それで皆様が、御自分の人生問題を信仰でどう解決しようかと思われるのは無理ありません。

はつきり乗り込むことです。乗り込んだらいいのです。お慈悲を頂くことは易いのです。ここがはつきりしたら、それから先のことは一々心配しなくてもおのずからわかつて来るのであります。このお慈悲を頂く所が何より肝心であります。

私は初め、簡単に御慈悲を頂いているつもりでありました。そして御慈悲頂いた信仰ある自分であるから、人々にも親切にして、この御慈悲を与えるのが、信仰生活であると、こう考えて居りました。この様に考えている人が多いようであり、こう考へて居りました。この様に考へて居る人が多いようであります。信仰生活とは人に優しくすることである。事に當つてみにくく乱れずに生きて行くことである。力強く生活することである。欲を起さぬことである。……ああであろう、こうであろうと思つて居るのであります。そして少しばかりそれが実行出来ると、もう自分は立派に御慈悲頂いて信仰生活をやっているとひとりぎめして居るのであります。私も初めそうでありました。私のその時の気持は、

「私は念仏して、御慈悲を頂いている。だから悪い人々には一層、こちらから優しくしてあげるのが、他力信仰の相である。自分は信者である。だから、悪い人々にも、親切にしてこれを導かねばならぬ」と言つて居りました。それは、善いことであり、またそう

然し信仰に生きるということは、一々の問題にあつて一々色々のことを考えるのが、信仰ではありません。この所をよく知つて居て頂かねばなりません。譬えて申しますと、この本郷の求道会館から、東京駅まで行こうといつたします。この会館を出て右にまがって、左に折れて、帝大の正門の前に出て、右に大通りを歩いて、お茶の水で、省線電車に乗つて……と、かくの如く曲り角に来る度に一々心配して、一つ一つ聞いて、どう行けば間違ひなく東京駅に着けるかと心配して行くのではありませぬ。譬えば、少し変でありますけれども、ここで今、円タクに乗り込みますと、途中どう曲るか何の心配もなくはからいもなく、一遍で東京駅に着くのであります。難行の陸路は苦しく、易行の水道は楽しいと仰せられるのは此処であります。易行の水道を弘誓の船に乗つたら、一々聞かなくても行けるのであります。無論人生の曲り角に来て、事にあつて、ああ行け、こう行けと、一々指図するのが悪い、聞くのがいけないと言ふのはありませぬが、何より大切なことは易行の水道の大船に乗り込む所です。ここが徹底しなくてはいけないのであります。多くの人は、ここがはつきりして居りませぬ、おろそかに、いい加減に乗り込んでいます。乗りこんだこと一人ぎめして居るのであります。

あらねばならぬと思つていました。だからそれをつとめて実行しておりました。

所が、これをやっていると、真面目にやればやる程、これは出来ることでないことがわかつて来ました。あさましい自分がわかつてきたのです。正直に自分の心をふりかへつてみると、冷汗が出る心である。人前でこんな自分が、慈悲とか念仏とか言つて居るが、とてもそんな資格がないことがわかつてきました。自力の廻向などはとても出来る自分でないことがわかつてきました。

世の中には、人に同情せねばならぬ、どうじゃ、こうじゃと力みながら、助ける自分が苦しんで行詰つて居る人が多い。よく私が言うことであるが、刑務所の教誨をして居る人が、囚人に優しくしてやろう、温くしてやろうと、しっかり教誨して居る。所が囚人の中にも色々の人がいて、いくら温く接してやつても喜ばず、却つて宗教に反感を抱き教誨師に反抗して来ることもある。すると、いつしか教誨師が、これ程やさしくしてやつて居るのにけしからぬと不平を言い怒り出してしもう。囚人の冷かな心を、温い心で感化しかけた教誨師が、何時しか冷たい囚人の心に感化されてしまつて、冷たい心になつて怒り出してしもう。

こんな人々が多い。世の中の人のやつて居る愛とか同情とか言うのにこんな例が多い。それはいけないことである

と言つてみた所が、結局人間のやることはいつしかこうなるのである。

そうなったとき、さみしい心で、愚痴を言っている人々に、「そうあるう、無理もない」と相手の立場をよく理解して、温く同情してやると「有難う、ようこの心をわかつて下さつてありがたい」と、とけてくる。

世の中にもこの例が多い。責めると、いよいよ冷たくなる。同情してやると素直によい方に向く。不幸の起るのは無理もない、愚痴の出るのはもつともだと、相手のやるせない心に同情してやると、この様なものを、そうまで言つて下さるとは、有難うございますと、その人はなる。これが、聖人の御和讃によるこぼれた所の、

如來の作願をたずぬれば 苦惱の有情をすてずして 廻向を首としたまいて 大悲心をば成就せり

のお心であります。ここで南無阿彌陀仏が口をついて出て来るのであります。これが一念發起であります。

### 底のない御慈悲

次に、ここで特に聞きおとしてならぬのは、この仏の御慈悲は、一度頂けば、それでももうすんだというような一通りのあさしい御慈悲でないから、そこをよくよく頂くことであります。

私のあさましい心が、実に一通りや二通りではない。縁

心ではいけぬ。自分はこうあってはならぬと言っている。

この時「なるほど、お前の行詰っているのは気の毒である心配するな、私が居る、どこどこまでも引受けてやるぞ」と飽くまでお見捨てなく引受けて下さる。この御慈悲が限りなくて、いくら困つていても、そうあるう、お前がそうあるから、いよいよ私は引受けてやるぞと憐んで下さる。この窮りのない広大な御慈悲、この何ともかとも言い様のない御慈悲に気のついたのが不思議。不思議とは思いがけないこと、何ともかとも、言いようがない。これ程行き詰つたきたない人生、これほどあさましいこの私を、どこどこまでも憐んで救うて下さる御慈悲、これが親鸞聖人のよるこぼれた如來廻向であります。これほど有難いことはありませぬ。

私共の当面して居るあらゆる困難の中にあつて、苦しんで居ればこそ、この私にかくの如き御慈悲がふりそそいでいる、このお心を聞いた時「ああ、有難うございます」と念仏申さんとおもう心の起る時、「すなわち」この「すなわち」が大切であります。すなわち、即得往生、住不退転（即ち往生を得て不退転に住す）この時その場で直ちに往生——死んでから極樂で初めて往生するのでない、——御慈悲聞いたその時、その場所、撰取不捨の御慈悲に救われる。これが一念、他力の信心、念仏の救い、ここの所が

にふれ、折にふれて次々とこのあさましい心が移り変わります。人生は矛盾の多い、苦しみの多い所でもありますから、相手次第、事情次第で、私共の心はどんなにでもわるくなります。このどこどこでもあさましく乱れ汚れて行く私の心を、一々どこどこでも、憐れと思つて、見て下さる仏の大慈悲であります。私共の罪とあさまじさが、限りなく出て来れば来るほど、もう呆れたと決しておっしゃらずに、どこどこでもどこでもその先、その先と仏のお心 が先にまわつて、私を憐んで遂に私の冷たい汚れた心の中に徹到して、念仏申さんと思ひ立たせて下さる限りの深い深い御慈悲であります。このお慈悲の陽にあたるような大きな厚い氷でも、どれ程深い闇でも、どんな困難な相手であろうともこれを照らし、とかし、破らずにはおかぬとのお慈悲であります。

お念仏申すのは、こちらの有難い心で申すのではありませぬ。有難くなれないこの心をどこどこでも憐んで下さる御慈悲が限らないので、とうとう「これはどうか！」と呆れてお念仏せずには居れなくなります。これ仏智の不思議であります。

### 仏智不思議

不思議ということを経く言つてはいけません。不思議というのは、思いがけぬこと、私がいきつまつたときこんな

徹底せねば救われぬのであります。

限りなく連続して起つて来る人生問題を持ちつつ、これと御慈悲を別々にして死んでから初めて助かるのが仏の御慈悲であると、人生と如來の御慈悲を別々にしてはいけません。

ここの所を聖人は、教行信証の一番初め、開卷第一の総序の御文にこう仰せられてあります。

竊（ひそか）に以（おも）んみれば、難思の弘誓は難度海（なんどかい）を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり。

難思の弘誓とある。まことに不思議の、思いがけぬ仏のお力であります。此処で面白いのは、ただ救うのではない。難度海、度（わた）るに度れぬ海を、乗せて度す大きな船と書いてある。ここが大切な所であります。

### 難度海

もう二十年も前のことでありますが、私が九段でお話している時、下関の市長が、信仰上苦しんで講話を聞きに来ていられた。

「私はいくら聞いても、御慈悲がわかりません」と泣いて訴えました。

私が申すには、「それは聞き方が悪い」下関と門司の間にも連絡船があります。乗れば何時でも行ける様に、聞け

ば何時でも救われると思っていなきるだろう。所が船がないのです。難度海である。難船しているのだ。度ることが出来ないのだ。ここが善導大師の二河白道である。三定死である。往つても死ぬ、留つても死ぬ、あと戻つても死ぬ。何れにしても必ず死ぬに定まっている、絶対絶命の岸に立っているのである。

その困っている私をめぐって

「ここに船がある、早くのれ、

その汝のために仕立ててある船である。早く乗れ」

と喚んで下さる。そして乗せて下さるのが、有難いのである。このたびはもういけぬ、さあどうしようかとなつたらそこが難度海、そこを私がいるぞ、心配するなと、どこどこまでも憐んで下さるのが御慈悲。御和讃に、

弥陀、観音、大勢至 大願の船に乗じてぞ

生死の海にうかみつ 有情をよほうてのせたもう。

「そのお前を、どうあつても救うぞ」と聞かせて頂いて、「有難い、度れぬ海を度して頂くのが有難い」となるのである。

### 無明闇

無碍の光明である。どんな障りがあつても、如来さまの御慈悲の光明を私のわるさでさえぎる方法がない。太陽の光を、氷で冷たくしようとしても、光が冷たくならず、

兎の如く人生を表面だけ泳いで渡る者は徹底していません。象の如く渡るのが本当であります。然し人生をこのように徹底して生きねばならぬと言つて見ても、実は人間には徹底する力がありません。人間はどこまでも兎の如き軽い仕方のないあさましい奴であります。このあさましくみぐるしい不徹底の私共を向こうから深く憐んで下さるのが如来様のお慈悲、あくまで助けねばおかぬとの仏の御慈悲の方が、とうとう私に徹到して下さい。「真心徹到する」と御本書にあります、これはこの如来のお心が私に徹到して下さいであります。

如来の御本願には、十方一切の衆生に対して、至心信樂（しんげう）をもって我が国に生れさせたい。若しそれが出来ないくらいなら、我もまた正覺（しょうがく）は取るまい、とあります。助けて頂くこちらがしぶといのは、先刻御承知であります。この疑つたり、反抗したりして、どこまでも逃げまわるこのあさましい愚かな心、これを「仏かねてしろしめして」仏の御真心をもつて、どこまでも憐み、温めて、徹底せずばおかじどのお心であります。御和讃に、

若不生者のちかいゆえ

信樂まことにときいたり

一念慶喜するひとは 往生かならずきたまりぬ。

とあります。どのような者でも徹底せずにはやまぬ廣大

いつしかこちらの方が融かされてしまう。氷のような冷たい私の心、私の心の無明の闇がどれ程冷たくくらくとも、如来の御慈悲の光をさえぎることが出来ないのである。

私のこの心を打ち明けたら、どんな人も呆れるであろう人も呆れて逃げる。自分もいやけがさして、こんな自分は見込みがない自暴自棄になる程のこの私の心。無碍の光明はこの私の心に呆れずに、温かく、あくまであわれんで下さる。このお心が無明の闇をとうとう破つて下さる日輪である、聖人は教行信証の総序の御文に仰せられてある。

### 徹底

これは文字の解釈ではありません。人生の一切はこのお心一つを頂かねば、決して本當の安心（あんじん）は出来ませぬ。色々の苦しみ、困難、色々な境遇、色々な罪と悩みの中に人間は生きて居ります。所が、大慈大悲の如来の廣大無辺のお心は、どこどこまでもこれを照らし破らねばおかぬとのお心であります。

徹底、徹底と今日よく言いますが、世間で言う意味は、私共が、足踏みしたり、あくまでやり通したりすることを言っているようです。所が、涅槃経の中に、徹底という言葉をとたとえて曰く、河を渡る時に、兎は水の上を泳いで渡り、馬は時々脚を底につけるが矢張り泳いで渡り、象は河の底に巨大な脚を徹して踏みしめて渡るとあります。

なお慈悲でありますので、とうとう、「ありがとうございます」となるのであります。

### 能発一念喜愛心

ここが頂き所、一番肝心な所であります。お正信偈の中に、能発一念喜愛心（よく一念喜愛の心をおこせば）とある。能く一念喜愛の心を発（おこ）すとは、こちらがお慈悲喜ぶ心を発すのではない。この広大な仏のお心を頂く時におこる。この限りのない御慈悲が私の中に徹底して下さいから一念喜愛の心がおこる、これが一念の淨心であり、金剛心であります。

金剛心とは、仏のお心が私の中にとどいて下さって、必ず往生して仏に成らせて頂けるといふ、火の中にも焼けず水の中にもくさらぬ金剛石のような心のこと。仏の正覺が私の金剛心、私のような奴が、この広大な御慈悲を頂かせて貰って、疑いも計らいもなくなつてしまつて、必ず往生成仏させて頂けるとなつたのが金剛心。

### 念仏ばかり

親鸞聖人のお聖教を頂くと、くりかえし頂くほど、この所がありがたい。法然上人の仰せられた「念仏一つ」、これを皆どう思っているのであるか。念仏一つと仰せられた裏は、外のもの皆駄目だ、役に立たぬということである。これは恐ろ

しい言葉である。こうなると修養も駄目だということになる。修養も道徳も駄目だと言うことは、修養そのものが駄目だと言うことではない。私の方が駄目であるので、立派に申分のない修養が出来ぬのである。修養が悪いのではない。その善いことが徹底して出来ぬ、この私という奴が悪いのである。

たとえて申しますと、私共が喰べたがっている果物を如来が御覧になって、お前はそんな果物やお菓子を喰べられる自分と思っているらしいが、どんな食物も、どんな医者も薬も、もうお前に取っては駄目である。もう死ぬばかり外に助かりようのないお前であるぞと仰せられる。かかる私と分った上は、かかる病人に喰べさせたい、そして助けてやりたいと親が作ったこの粥一つ、こればかりである、粥一つである、これが法然上人が仰せられた「ただ念仏一つ」である。

こう仰せられても、やっぱりまだ他の物が喰べられると思っている人々には、親の作ってくれる粥の有難さは分らぬ。万行諸善の出来るとうぬぼれている人々には「念仏一つ」の味は分らぬ。

人生問題でも然りである。金で解決出来る、学問や才智があるからこれでよいと思っている人々は、果物でいいと思っている人である。仏はそれでは生きられぬぞ、まこと

にお乗り、私が既に乗っているのだから、私の行く所に一緒に「行くよ」

こうまで言われて見れば、親鸞聖人が苦しみぬいて比叡の山を下り、吉水の法然上人を訪ねられた時、聖人にとって他の道は全くなく、他の船もたずに、難度海のただ中に溺れて居られたのであるから、他の船はなく、他の薬はなく、法然さまが「一緒に死のうよ、私が乗っているこの船にあなもお乗り」と仰せ下さるのを聞いては

『たとえ法然上人にすかさされまいらせて、念仏して地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候』  
とよろこびいさんで、ただ念仏されたのである。

### 墮ちて見よ

こうなったら人生は楽なもの、皆、墮ちまいと思っっているから心配でならぬのである。ひっくりかえる方を先にせよ。天竜寺の峨山和尚は近代の傑僧であったが、曰く、  
「勝とうと思つて相撲するから負ける。初めから、ころがって居れ、負けはせぬ」と。

私も今日までそうして来ました。事をやる時は初めから不成功を覚悟してかかる。だから失敗したからとて、はじめからちゃんと腹が出来ている。そして、どうなっても、そんな人生であり、人間であればこそ、そんな奴を助けたい、どこまでも見捨てぬぞと仰せられ、仰せ通しの御慈悲

の安心は出来ぬぞと、慈心切々とおよび下さる。仏の大慈大悲の粥、これ一つであるぞ、と仰せ下される。この粥、りを軽く取つてはならぬ。これは瀕死の病人に對して「他の一切は駄目ぞ、もうお前にとっては、親の私が作ったこの粥ばかりぞ」との仰せである。

この切ないお心をまっすぐにわが身にひきあてて「ばかり」を聞かねば駄目。他の薬や、食物や、財産や、才智で行ける位なら、如来は「念仏ばかりぞ」とは仰せられぬ。

『いずれの行もおよびがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし』（歎異鈔第二条）  
であればこそ

『親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと（法然上人）の仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり』（同上）  
である。

これは親鸞聖人の御信心であるばかりでない。法然さまの御体験である。そして善智識の御教化を頂く時の皆の立場がこれだからねばならぬ。

「皆どうしてよいか分らぬなら私の乗っているこの船と一緒に乗ろうではないか。私もいろいろ苦しんでさがしたが、他の道がないのでこの船に乗った。私と一緒に行くようよ。さあおのりなさい。だまされたと思ってこの船

がある。次々と人にだまされても、失敗しても、もともとそれは覚悟の上のことである。それにつけてもいよいよ大悲大願はたのもしい。

それほど念仏は広大なものである。これを頂いたのが金剛の一心、専修専念、一心一向、これが親鸞聖人がはっきり頂かれたお心である。

### 似而非信者

所が一般にこりかたまった信者の人々は、この専修とか一心一向とか仰せられたことの意味を全く履きがちがってしまっている。そしてこう思っている。

一心一向とは、仏さまは阿弥陀さま一つ、お念仏一つ、それ以外の一切は敵の様に思つて、かちかちにこりかたまって偏狭で排他的になることだと思つている。このかちかちの心が少しでもゆるんだら阿弥陀様は助けて下さらぬと思つて、しきりにわが心をかためて力んでいる。

こんなことではいけぬ。これは、わるがたまりという奴で、信仰でも何でもない。こんな風にあやまって、わるくかたまった連中と連中とが会つて、念仏一つだ、いやそうでないよ、しきりに他をけなして喧嘩している。これはとんでもない間違いで、専修専念、一心一向でも何でもない。

この言葉の正しい意味はこうである。



他人の言う所は皆それぞれ道理があり、値打のあることであるかも知れぬ。それらの薬は皆立派なものである。然し私は痛で、もう他の医者や他の薬では間に合わぬ私の病気に取っては、医者や阿弥陀様一人、薬はお念仏頂一つである。こういうわけである。

皆、自分の病気がどんなものであるかはしらべもせず、忘れてしまつて、この医者に限る、あの薬がよいと喧嘩している。病気でないのなら、どの医者でも、どの薬でもよい。所がこの私が、どんな医者でも薬でも間に合わぬ大病人であることが分つたのである。人と喧嘩する必要もなく、そんな呑気なひまはある筈がない。他人の医者や薬のよしあしでない。弥陀一仏とは、他の諸仏菩薩がわるくて、力がないというのでない。この私が悪いのである。私の病気が、人並の軽い病気でないので、人並の結構なお医者さんでも、もう間に合わぬのである。他の薬で治る私の病気でないのである。

### わがためは無上法

所が、かかる私を憐んで、間違ひなく救つて下さるための広大な、南無阿弥陀仏のお薬である。アカダの妙薬である。正像末和讃（しようまわつわさん）に

無明長夜の灯炬なり 智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり 罪障重しとなげかざれ、と。

私の話を聞いて下さると、私は、人間と云うものは随分ひどいことをするもので地獄必定であると申します。その悪いことをする奴が、広大な仏の御慈悲を頂いて見ると、金剛心を頂いて、横ざまに五趣八難を超えて、一遍で一念に横ざまに現生でこれをとび超えて、無量の利益を身心に獲るのであります。

### 正しき現益

近頃は現世利益と言うことがやかましく論ぜられていて、一般の人々は、金がもうかつたり、病気が治つたり、家庭が円満になつたりすることが現世利益だと思つている。浄土真宗の人々も近頃しきりに現世利益を主張しているが、多くはそんな意味に使つたがっている。そして真宗にも現世利益があるぞと主張して、現世利益和讃や、教行信証、信の巻を引いてくる。かかる主張は全く間違ひである。親鸞聖人の仰せられた現生十種の益とは、決してかかる金や病や夫婦円満のことではない。治らぬ病気の涙の中にも、貧乏のドン底の苦しみの中でも、何処までもお見捨てない御慈悲が徹底すれば、治らぬ病気が治らぬまま、その中で、この御見捨てなき御慈悲に攝取されて、自分は幸せ者であるとなつて見れば、病気をそのものが治る治らぬは最早問題でなくなる。これが現生で立派に救われたのである。こうなると、愚痴も不足もなくなつて来る。これがまこと

弥陀にまかせてただ念仏せよと仰せられる。歎異鈔の第二巻を頂いてみれば、このお心がよく頂ける。同じく歎異鈔の第十二巻にも、

『たとい諸門こそりて「念仏はかいなき人のためなり、その宗浅し、いやし」というとも、更に争わずして「われらがごとく下根の凡夫、一文不通の者の信すれば助かる由うけたまわりて信じ候えば、さらに上根の人のためにはいやしくともわれらがためには最上の法にてまします。たとい自余の教法は勝れたりとも、自がためには、器量およばざれば勤めがたし。われもひともし生死を離れんことこそ諸仏の御本意にておわしませば、御妨げあるべからず」とてにくい気せずば、誰の人かありて仇をなすべきや』

こうなつたら喧嘩はいらぬ。結局自分の病気が治りさえすればよいのではないか。私一人のためにこのお薬頂いたのが一向一心である。自分で自分の心を固めあげて、一心一向にするのではない。広大無辺な大慈悲が私に徹到して下さるので、私の心が一心一向にさせられるのである。

### 現生の利益

この御慈悲頂いた一念に、五趣、八難をたちまち横ざまに超えてしまうのである。死んでからではない、この現生で、一念の時にである。

の現世利益であつて、これを頂かなくては、救われて居ないのである。

蓮師の仰せに、堺の日向屋は三十万貫の巨財を抱いていたが、死んで暗い所に墮ちて行つたであらう。大和の了妙は貧しい寡婦で、かたびら一枚着かねて居たが、この度死んだが、間違ひなく仏になつたぞ、と仰せられてある。この焼いても無くならぬ宝物を頂くことである。たとえこの世の宝は持たずとも、了妙は宝持ちであつたと言へる。この宝一つ頂けば、この世のもろもろの悩みは超えさせて頂くことが出来る。弥陀の大慈悲心を頂いて、攝取され、正定聚の位につかせて頂くとき、その一念に間違ひなくお浄土に生まれ、仏になることはきまつてしまふ。だから、もろもろの悪業煩惱を転じて、無生法忍（むしようほうにん）を頂くのである。

『弥陀の光明に照らされまいらする故に、一念發起するとき金剛の信心をたまわりぬれば、すでに定聚の位におさめしめたまいて命終すれば諸々の煩惱悪障を転じて無生忍をさとらしめたまうなり』（歎異鈔第十四巻）

ここの命終すればとは、この肉身が終わつてから初めて悪業を転ずるのではない。信の一念が、前念命終、後念即生である。この一念から煩惱を転じて下さるのである。私の苦惱と困難をあわれんで下さる御慈悲を頂いてみれば、こ

の苦惱も転ぜられる、あさましい心も、みぐるしい心も転ぜられる。転悪成善(てんあくじょうぜん)とは現世の御利益である。

### 報謝の念仏

この御慈悲で救って頂くことをよろこぶ一生涯のお念仏は大悲の仏恩を謝するお念仏、御恩報謝はここで出来る。広大な御慈悲に私の罪も汚れも一切引き受けて頂いた上ではないと、しみじみと落着いた御報謝にはなれませぬ。何もかも御慈悲に引き受けて頂いた上で、初めて御恩報謝である。報謝とは五分五分の報謝ではない。これだけして頂いたからこれ位でよからうとやる勘定ずくの報謝ではない。御慈悲に腹ふくれて、おのずから出て来て下さるお念仏、これが御報謝の念仏であります。

### 十種の現益

現生十種の御利益はこのお念仏よろこぶ人に入り満ちて下さるのであります。ごく簡単に申し上げて見ましょう。金剛の真心を獲得する者は、横(おう)に五趣・八難の道を超え必ず現生に十種の益を獲、何ものをか十とする。

一には、冥衆護持之益(めいしゅうごじのやく)  
あらゆる神々や人々が、ひそかに知らぬ所から護つて下さる。

二には、至徳具足之益(しとくぐそくのやく)

を粗末にする……となつては、どうもおかしいことである。

あの医者でも、この医者でも間に合おぬというの、医者者の罪ではない。私が病人である、この助からぬ私をお助け下さる御慈悲さまであります。こうなったら喧嘩になりませぬ。治る筈のなかつた病が助かる薬が出来たからと云って、この薬を貶すお医者さまはあるまい。一心に弥陀一仏に帰命するというのは、諸仏が悪いというのではない。この私があるのだから、この助けようのない私をお助け下さるのが阿弥陀如来であると、こうなったら諸神諸仏が皆ほめて護つて下さる。喧嘩等には決してならぬ。これが現世利益和讃であります。

一切の功德にすぐれたる南無阿弥陀仏となれば  
三世の重障みなながらかならず転じて軽微なり

南無阿弥陀仏となればこの世の利益きわもなし  
流転輪廻のつきまえて 定業・中天のそこりぬ

南無阿弥陀仏となれば、梵王、帝釈、諸天善神ことごとく、よるひるつねにまもるなり

南無阿弥陀仏となれば、観音、勢至はもろともに  
恒砂塵数の菩薩と、かげのごとくに身にそえり

あらゆる功德がかけめなく身に具わる。

三には、転悪成善之益(てんあくじょうぜんのやく)

あらゆるあさましいこと、苦しいことが転ぜられる。

四には、諸仏護念之益(しよぶつごねんのやく)

諸々の仏さま方がお護り下さる。

五には、諸仏稱讃之益(しよぶつしょうさんのやく)

諸々の仏さま方がおほめ下さる。

六には、心光常護の益(しんこうじょうごのやく) 仏さまがお光の中に常におさめとってお護り下さる。

七には、心多歡喜之益(しんたかんぎのやく)

心に多くのよろこびが溢れてくる。

八には、智恩報徳之益(ちおんほうとくのやく)

御慈悲が有難く頂かれて御恩に報ゆる生活をさせていただく。

九には、常行大悲之益(じょうぎようだいひのやく)

仏の大悲がおのずから口にあらわれて、これが仏の衆生済度の手だすけとなる。

十には、入正定聚之益(にうししようじょうじゅのやく)

必ず往生成仏する身にならせて頂く。

これをさかさまにしてしまつて、浄土真宗の信者は神々をおろそかにする。弥陀一仏とこりかたまつて、他の諸仏

無碍光仏のひかりには無数の阿弥陀ましまして  
化仏のおのことごとく眞実信心をまもるなり

南無阿弥陀仏となれば十方無量の諸仏は  
百重千重圍繞して よろこびまもりたまうなり

又、歎異鈔、第七条には  
「念仏者は無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば  
信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍する  
ことなし、罪惡も業報を感ずることあたわず、諸善もお  
よぶことなき故なりと、云々。」

と仰せられてある、これである。

迷わぬ男

先日来、心の中に出てきて、言わずにあることを一つ申  
します(もう時が切れて、おそくなつておりますが……)

今から、三十年も前のこと。この東京府三多摩……これ  
は全く仏法の無い所、浄土真宗のない所、ここへはじめて  
求道会から雑誌を送りました。すると或時、一人の青年が  
やってきて、私に是非講話に来てくれと云う。そこで私は  
出かけました。

その村がやかましくもめて居る頃でありました。所がそ

— 18 —

— 17 —

の村の全く宗教を持たぬ一人の男が、大変人生問題で苦しんで、やけになって身をほろぼし、家をこわしている者がありました。今日は寺で何かたになる話があるそうなど聞いてやって来た。そこで私が仏の広大な御慈悲のお話をしたところが、その人が、よほど嬉しかったらしい。自分が苦しみ悩んで、やけになって、それでも落着けずに悶えている所に、この深い御慈悲を聞いて大変に心にしみてよろこんだ。翌日停車場まで私を送って来て御礼を云うていた。

後日、その人が上京して私の所を訪ねてきて、信仰を求めてきた。あの時はまことに有難うございました、というので、私が、何処が有難かったかとその心を問うてみるといわく。

「一寸申しますと、この頃私の方で消防の稽古をしていました、若い者のやるのを見ていますと、皆水をかけるホースの口を持つことを好いていて、水を汲むことは皆忘れて居ります。私はこの信仰のお話を聞かせて頂いてから水をかけることも大切だが、水を汲むことも大切であることを知りました。」

と云う。そこで私は、また御慈悲をふかく話しました。その後になって、又この男がある時私を訪ねて来ました。そしていわく。

「おかげです、と。」

私はこれを聞いて驚いた。「方角の善悪を云ってはいかぬ日の吉凶を占ってはならぬ、それは難行難修であって、当流では最も嫌うことである」と浄土真宗は昔から教えているが、お前知っているかと言えば「いいえ私は先生から御慈悲一つ聞いたので、その外のことには知りません」と言う。

こりかたまっている浄土真宗の信者が、いよいよよとなるとかえってつまらぬ迷信に迷って、祈ったり、騒いだりするのには、どんなことになってもあくまでお見捨てなき御慈悲に安心しているこの男が、びくともせぬのである。「よく分ったな」と言う、「先生の雑誌に書いてありました」という。この男の出した雑誌を見ると「帰命」について私が書いている所を出した。これは私が教行信証の御文を引いているだけである。

「優婆夷（うばい。男の信者）この三昧（さんまい）を聞きて学ばんと欲せん者は、自ら仏に帰命し、法に帰命せよ、比丘僧に帰命せよ、余道に、つかうることを得ざれ、天を拜することを得ざれ、鬼神を禱（まご）することを得ざれ、吉日良日を視ることを得ざれ」（般舟経）

この男は、この御文を掬（おき）として外的律法的に責められていると見ていない。御見捨てなき如来の御慈悲に腹ふくれて

「私は、今日浅草の観音さんに詣って来ました。有難いこととでありました。」

と。何故有難かったか、御利益でもあったのか、と言うといわく、

「先日私の家で普請（ふしん）を致しました。所が家が鬼門（きもん）に当るから大変なことがきつと起る、やめたがよいと、しきりに友人達が心配してとめてくれました。」

そこで私は答えました。業道流転（ごうどうるてん）の人生だもの、病人も出来よう、死人もあろう、仕方がないことだ、私はそれは構わぬよと。するとしきりにとめたその男が申しますには、面白い男だ。世の中の人は皆病氣や貧乏が困るので方角を気にやんでいるのに、病氣しても構わぬ、死んでも構わぬ人には何とも仕方がない相手にならぬと言って帰って行きました。暫くすると私が病氣になりました。母がまたなりました。なっても構わぬ、死んでも構わぬ、人間の力の許す限り手当養生する外はないと云っていましたが、若し私が信仰のことを聞いていなかったら、さぞ当惑したことでありましょう。然しその時、私は思いました。治らぬ病であるならばこの病気で死んでも仕方は無い。かかる業深き私なればこそ、いよいよお見捨てなき御慈悲があると頂いて居ましたので、しっかりして居ました。若しその時、信仰がな

祈れと言われても祈る必要がない。祈れないのである。そこでこの男は、自分も普請した後に病氣したけれども祈りも何もしなかった。所が自分も母もやがて病氣がよくなりましたので、これは有難いことであると、今日は浅草の観音さまに詣って来ましたというわけである。現生十種の益の一つに諸神諸菩薩がよるひるお護り下されてあるとお示し頂いていますからというわけである。この参詣は祈符のためではない、感謝のためである。南無阿弥陀仏と、弥陀の御恩を感謝するために行くのである。こういうわけで浅草の観音さまに詣って、求道会にやって来た。

これは掬（おき）で頂いている信心ではない。内から御慈悲に腹ふくれて、おのずからこうしかりなっているのである。広大な御慈悲頂いたら必ずこうなる。現在の東本願寺が、とにかく私共の心配しましたことが、大体においてレベルに乗って来ました（句仏上人の復籍のこと）のも、広大な御信心の上から、皆様が自重なさったからであります。

#### 当来の世の利益

但しこの如来の御廻向の信心は、現益（げんやく）だけでは決してありません。煩惱具足の私は、この世ではさとりは得られませぬ。あくまで彼土得証（ひととくしやう）で、かの世に往生成仏させて頂く当益（とうやく）で、救いが完成するのであります。往生成仏させて頂く時、はじめて本當の仏さ

まになるという所が大切であります。

私も、また皆さまも、御慈悲を喜ばせてもらってはいませけれど、命終るまではあさましく汚れ果てた煩惱の日暮らしてあります。

浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがとうございました  
虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし  
と、親鸞聖人が和讃に御悲歎述べられた通りであります。どうかお互いにこの広大な御慈悲一つを頂いて、大悲を仰いで、ただ感謝、わが身を眺めては、ただ懺悔と日暮しさせて頂きましょう。こうなりますと、真諦門（しんたいもん）そのまま俗諦門（ぞくたいもん）にあらわれてきまして、ここの所が人生生活の基礎となつて、まことにありがたいのであります。

### 閉会後の状況

御講話全く終わる。しばらくは水を打ったように静まりかえっていた講堂に、先生がしずかに椅子から起立して、背向御本尊に向かわれると、満堂念仏の声おこる。

先生、立たれたまま偈文読誦、一同唱和。夫人向かって左の壇上にあがりたまうや、先生辛うじてその方へ歩みよられんとする気配。歩行ほとんど不可能。夫人のさし出したまう杖を左手に、右より夫人に抱かれたるが如くして、除々に、極めて徐々に、左側の階段を二つ三つ降りて、控

にとつても、金子齊法兄、高原先生、安波勲八先生、其他を通じて間接に、又直接に、現当二世にかけての善知識である。先生の最近の御講話を私自ら筆録させて頂くことが出来たのは、私の天竺（てんじく、印度のこと）巡礼行と共に、昭和十二年のみならず、生涯の思い出と感謝の一つとなるであらう。

かねて一方ならぬ御恩顧を蒙っている高原先生は、暑中見舞をかね、盆の施本として適当な一文を草することを私に求めて居られた。正月号の「聞法の一路」もかかる先生のお求めによつたものであった。

本年三月初旬、思い出深き東京本郷の求道会館で、金子法兄夫婦と席をならべ私共夫婦が、親しく先生の御講話を聴聞させて頂いたこの聞法の記録を、再び高原先生のお求めによつて小誌七月号の巻頭に頂載させて頂きましたことは、まことに有難いことと思う。私は、この草稿を、日本郵船、丹後丸の船室で浄書させて頂いた。船は明朝早く英領ホソノンの港に到着する。目的地の印度と日本との三分の一の航程にある。長崎、上海、香港と、まことに愉快な海の旅をつづけて来た、はるかに故国の同信に、つつしんでこの一文をささげたてまつる。

昭和十二年四月九日深夜 丹後丸にて

室の戸口より奥に入りたまう。

輝ける童顔、しずかなるお念仏。かかる御不自由なる御体でありながら、一度壇上に立ちて、大悲を讃歎したまうや、光顔魏々、熱烈にして、しかも温情あふれる如く、かざらず、力まず、よどまず、淡々としてしかも信念に燃え（じんとんぶる）淳々縷々として説き去り説き来り、自他共に時の幾何なるやを知らず、御講話終りて、ほっとして大時計を見れば、すでに午後一時に近し。「念仏者は無碍の一道なり」とはけだし先生のためにある語か。

× × × × × × ×

御講話後、金子兄と共に、控室にて先生に御挨拶申しあぐ。三年振りなり。地方より先生を慕いてお訪ねせる人々や次々と慈愛溢れる如く一々御物語りあり。如何にも御嬉し気に拜せられて、御病人とも覚えず。私は渡印、仏蹟巡礼のことを申し上げて、お疲れの中なれば早々にお暇申して出す。金子兄夫妻、愚妻と共に、御講話に打たれて、黙々として御念仏申しつつ会館を辞す。遇いがたき善知識に遇いたてまつれる身の幸を切実に感ず。昭和十二年三月七日なり。

### 後序

近角常観先生は、高原憲先生（長崎市外東長崎町。東望療養所長、是真病院長）にとつて魂の育ての親である。私

### 近詠

福島 政雄

一月十九日 母の祥月命日

四十七年月日経ぬれどたらちねの母は今なほいますか  
ごとし

二月十九日 姪のために普門品の偈を写す

普門品偈をうつし終へししみじみと観音経のころをお  
もふ

一月二十六日 歎異抄

歎異抄のころを讀みて今更に信心うすき我が身を  
もふ

三月六日 父の祥月命日

尽十方仏の光、亡き父のひかりとなりて胸にしみ入る

三月十九日 法華経 序品

法華経の序品読誦し何となく心しづかに人の世をおも  
ふ

四月十九日 歎異抄第一章

罪惡深重わが身の上にしみじみとふりかへるなり老の  
此の身は

あ が き



歳末御多忙のことと存じます。良寛さん

の

いと早き月日なりけり  
いと早く年は暮れけり

われ老いにけり  
の歌の心も年と共に身にしむことであります。

来年は明治百年を迎えますにつけ、明治、大正、昭和の三代にわたつて仏教界に大きな灯火を掲げて下さつた近角先生を憶い感慨の深いものがあります。

ことに十二月の先生の御忌月に特に先生の德音に浴したいと願つておりましたところ、長崎市の平岡垣様から御寄贈いただきました、山本晋道師著「畢竟依」の中に、近角先生の病後の御講話の筆録がありましたので、飛びあがるほど嬉しく、再読、三読して、早速慈光誌へ転載のことをお願い申しました。平岡様は、「畢竟依」の再版

にお骨折り下さいました高原憲先生の御許可を得られました由をお通知下さいましたまことにありがたいことでありました。歳末、匆々の中にも、先生の慈訓を身にうけて下さいますようお願いながら本年の編集を終ります。

十月末日の一道会で、「生活と信仰」について白井成允先生の御話があり、続いて西元宗助さんが、北米の仏教、ことに真宗の人々に接しての感想の一つとして「六、七割の真宗信者の家庭で、現世は「生長の家」の教え、来世は仏様のおたすけといった状態」とのこと。これは日本でも、死後は仏、現世は神、と言うことを聞々聞きました。が、これみな、仏教が現実生活の指針となり支柱となっていないところ、所謂「空家には狐狸が自由に出入りする、主人を持って」との兼好法師の誡め通りから、仏法が主人(あるじ)となっていないからである、油断なく聞法させて頂きたいことです。近角先生が現在からの救済を高唱して下さつたのも、こうした点を深く知り抜かれてのお叫びでありました。「横超の現益」も、先生の悲心がそこにあふれております。他人事でなく、私共一人々々の問題としてお教を頂きましょう。

灯火の用意かしこし秋の暮 ばせを  
古里や臍(ほぞ)の緒に泣く年の暮

全上

御案内

◎ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会。

◎ 市電新郊通り一丁目下車。東へ入ル三筋目左入ル二軒目。

◎ 毎月二十四日、午前・午后、昭和区小桜町、教西寺、法話会。

◎ 市電、御器所通り下車。桜花学園の東側

定価 半年 二百五十円(送共)  
一年 五百円(送共)

編集・発行人 花田 正夫  
電話八二一〇七〇三七番

印刷人 本田 政雄  
愛知県西加茂郡三好町大宇福谷

名古屋市南区駄上町二ノ八八  
発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番